
二度目の春

よっちい

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

一度目の春

【著者名】

よしお
こじ

NO6860

【あらすじ】

夏休み明けの始業式。俺はあの子が引っ越してしまったことを知る。猛烈に後悔した俺。その帰りにおかしな老人に過去に戻れると言われ・・・。

1・中3 夏（前書き）

初めて書く小説なので可笑しな所があちこちにあります
がありますが・・・
よかつたら読んでください。

どうしてこんなことになってしまったのだろうか。

俺は見慣れた団地の前をとぼとぼと歩く。

俺は学ランの右ポケットから二つもの銘柄のタバコと五百円ライターを取り出した。

一本出して吸おうとする。

周りの目など気にしない。

大人からの説教など慣れているから。

仮に注意などされても俺は無視するだろう。

全ていつもどおり。

俺は中学2年の夏いろいろから不良と言われ始めた。

喫煙のほかにも気軽に言えないようないろいろな悪いことをやった。

俺の見た目や行動を説教してくる大人はたくさんいる。

補導・説教はうつとおしいものだけれどそんな自分はかつこいいと思つてた。

俺は橋に差し掛かった。

ふと川を見ていたくなり橋の手すりに両肘をかけた。

そういうえば、俺はカツコよくなりたくて不良になつたわけじゃなかつた。

中2の春ごろ。

俺は葵と喧嘩したんだ。

しかも原因も忘れてしまつたよつなどともせきいなことから始まつた喧嘩だ。

この橋は俺と葵が仲良かつたころ下校の時一人で何回も通つた。

俺と葵は家が隣同士で幼馴染みという仲だつた。

俺は葵のことが好きだつた。

だけど俺は意地つ張りだから、仲直りなんかできなかつたんだ。

そしていつのまにか互いを無視するようになつてた。

俺はその寂しさを埋め合つたかつたんだ。

そして俺はいつのまにか不良に誘われて不良になつてた。

俺は口にくわえたタバコを川に向かつて吹き捨てた。

ふと俺の肩を誰かが叩く。

また地域住民からの説教か。

俺は振り向く。

俺の肩を叩いたのは白髪の老人だった。

「なんだよ、じじい」

俺は何か文句でもありますか、というふうにその老人をにらむ。

「惱んでるな、少年」

「はあ？ 仮に惱んでてもアンタには関係ねえ。うせろ」

老人は俺にびびる様子もなく続けた。

「少年よ、過去に戻つてやり直させてやるうか？」

どうやら説教ではないようだ。

それにもしても、この老人ぼけてしまっているのか？

俺は呆れた口調で言つ。

「じじい、寝ぼけてんなら困りますわ」

「最初はみんな信じない、でも本当に戻れるんじゃ

老人は真顔で言つた。

俺は呆れたよつて言つ。

「すみとアンタはどうえもんか」

「それならお前さんはのび太君じや、もええ。一生後悔しておれ
ばええ」

老人は俺に背を向けて去つていこうとした。

俺は一生後悔という言葉に不安になり慌てて声をかけなおす。

「ちよつー分かった！信じるつー信じるからー」

老人は俺を呆れたような目付きで見た。

「 しょ う が な い の お 、 じ ゃ あ 3 0 0 0 円 」

老人は俺に手の平を差し出す。

「 金 取 ん の か い ！」

「 そ う じ ゃ 、 世 の 中 は 金 で 動 い て お る ん じ ゃ 。 で も 良 い じ ゃ な い か 、 過 去 に 戻 れ る ん じ ゃ 」

「 じ ゃ あ 最 初 に 方 法 を 教 え て く れ よ 」

「 だ め じ ゃ 、 逃 げ る カ も し れ ん か ら な 」

俺は少し嫌な顔をしてみたがそれでなにも変わるはずはなく、しぶしぶ財布から野口英世を三枚取り出して老人の手の平にのせた。

「 つ で ？ 方 法 は ？」

老人はおもむろにポケットに手を入れ、懐中時計のようなものを取

り出す。

「これじゃ

「その懐中時計で？ありがちだな」俺は文句を言つ。

「使わなくともよいんじゃよ？」

「ウソだよーウソー冗談でしたあー言つてみただけえ！」

「これで過去に戻ることが出来なかつたら俺はこの老人を川に投げ落とすかもしない。」

「まつ、使い方は分かるじゃろ。」

老人は時計を投げよーす。

俺は時計をじつくりと眺める。

そして俺は気付き、顔を上げて言つ。

「おーーこの時計、針がねえぞ！」

しかし俺の周りに老人はいなかつた。

「消えた・・・」

俺は元壁にぼつたぐられたことに気付いた。

俺は全てに悲しくなり時計を川に投げ捨てようとした。

しかし俺はそれをやめ右ポケットにしまった。

家に付くと、もう8時をまわっていた。

母親にただいま、と言つて俺は一階にある自分の部屋へ向かつた。

俺は自分のベッドに勢いよく飛びつく。

仰向けになりなんとななく窓を見る。

葵の部屋と俺の部屋の窓は向かい合つてゐる。

俺と葵が仲良かつたころ、俺と葵は夜中に窓辺と窓辺で話したりしてた。

けれど今、葵の部屋の電気はいつまでたつてもつかないだろう。

葵は昨日引っ越ししてしまったから。

理由は親の急な転勤らしかった。

クラスでも知っている人がいいくらい本当に急な転校だった。

実際、俺がこのことを知ったのも今日の始業式でだ。

俺は今、猛烈に後悔している。

もう一度中学校生活をやり直したい。

俺はこの行き場のない思いをベッドにぶつかりながらベッドの上で激しく暴れる。

少し涙が出てきた。

ふと、右太ももの辺りに「ゴシゴシ」と違和感。

俺は涙を布団で拭いてそれを触つてみる。

忘れていた。

もし。

ほったくつで置つてしまつたと思われる懐中時計だ。

もしもあの老人の言つていたことが本当だつたら。

俺は右ポケットからそれを取り出してみた。

ビンヤツヒ使うのだらうか。

針がない。

なかなか重くて金色である。

しかしこれはビンヤツヒでも壊れてこむところやつである。

俺はしばらく時計を見ていたがなぜか眠くなり、いつの間にか寝てしまつていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0686c/>

二度目の春

2010年10月28日06時28分発行